

は、だれもが自分自身の体験世界を内省することによって確かめることができる」という点に、哲学を公共的な営みに改造しようとするフツサールの狙いがあった。

しかし自閉症児の世界に迫る、ということになる、各人の内省によって確かめることはできない。だとすればますます、どのようなところから自閉症児の世界の特質を取り出し理論化したのか、ということがきちんと辿れるような手続きを工夫する必要があるだろうと思う。

違和感のほうを多く書いてしまっ

竹田青嗣著

『現象学入門』

学問の知の危機が叫ばれて久しい。学問の世界の目指すべき研究対象が生活世界から大きく遊離してしまつたがゆえの危機である。とりわけ深刻な領域は、人と人が関わる中で営まれる臨床実践の現場である保育、教育、心理、医療、保健、福祉などの諸領域である。

た。しかし、村上のこの本は、フツサル現象学に対する高い水準の理解からスタートしており、かつ、時間・空間・人格の成立とはどういうことか（正常発達の世界の成り立ちをどうみるか）という点ではオリジナルで刺激的な思考を含むものである。思考の一貫性という点でも高く評価できる著作である。機会をあらためて、それらの論点についても論じてみたい。

西研

(注)・けん/東京医科大学・哲学教室

いては、その研究方法をめぐって、量的研究や質的研究が乱立し、いまだに試行錯誤の段階にあつて混沌の度合いを深めている。このような状況にあつて臨床現場に身を置く者は、何をどのように評価したらよいか、その基本となる考えをもち得ず、暗中模索に近い状況にある。そこで求められているのは、自然科学とは異なる人間科学の領域における臨床と研究をどのように考えたらよいか、その思考の原理である。

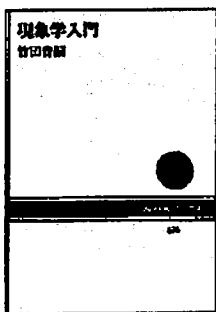
評者にとつて本書との出会いは衝撃的なものであつた。評者が抱いていた臨床と研究に対する漠たる疑問に、本書は明確な輪郭を与えてくれたからである。本書はフツサルが創設した現象学を一般読者にもわかりやすく説いた入門書であるが、その内容は過激でかつ革新的である。

*

近代科学における自然科学が拠り所としてきた「客観性」、「普遍性」、「論理性」は非常に説得力をもつ堅固な三本柱である。そのため人間科学領域の研究者も、この三本柱に倣つて仮説を立て、データを集積し検

証するという手続きを踏む量的研究を遂行することが少くない。そうした現状に物足りなさを感じ、対抗するようになり、少ない事例を対象に、量的研究では埋もれていたものに目を向けようとする質的研究の動向が注目されている。いまや、人間科学領域における研究方法は、量的研究から質的研究まで百花繚乱の趣を呈している。

今日の精神医学における国際診断基準に代表されるように、客観性を担保するために極力「主観」を排し、「客観的」とされる行動観察がもてはやされている。事例検討の場でよく出会うのは、報告者が患者(クライアント)の言動ばかりを取り上げ、治療者である報告者自身がその場で何を感じ、何を思い、どのように関わったかについて語られることは極めて稀である。治療者は面接場面においてまるで黒子であるか



NHK ブックス 1989年
966円 (税込)

のような扱いである。患者の症状や
障碍とみなされるものについても、
客観的に把握するために検査や評価
尺度などが盛んに使用されている。
われわれをこのような行動に駆り立
てる大きな要因が「主観／客観」図
式への囚われである。

*

著者が本書で最初に取り上げてい
るのが、まさにこの「主観」と「客
観」の問題である。近代哲学の根本
問題こそ「主観と客観」ないし「認
識と対象」であったからである。

「認識は、認識する主観の認識であ
る」、「認識には、認識される客観が
対立する」。そうであれば「認識は、
認識された客観と認識自身との一致
を確かめうるか」(二七頁)。つまり
は、ある対象を認識する際に、その
対象そのもの(客観)と認識された
対象(主観)が同じかどうかをどう
すれば確かめうるかという問題であ
る。主観(本人)によるその対象の
認識が、対象そのものと同じかどう
かを確かめるためには、確かめる主
体が主観の外に出なくてはならない
が、それは不可能である。「論理的

に考える限り、人間は原理的にその
一致を確かめることはできない」
(二八頁)ゆえ、**「主観／客観」図式**
に孕まれた矛盾を解き明かさなけ
ればならない。これこそフッサール
現象学の取り組んだ最大のテーマで
あった。

自然科学によってもたらされた近
代科学の実証主義は、仮説を立て、
実験を繰り返すことによって、**「客
観に近づ**
く」という方法であるが、これを人
文学や人間科学の分野にも応用す
ることによって面倒な問題が生まれ
ることになった。**「主観／客観」**
という前提から出発する限り、われわ
れは論理的には必ず極端な「決定
論」か、それとも極端な「相対論」、
「懐疑主義」、「不可知論」かのどち
らかにいきつくことになった。ポス
トモダンの今日的思想状況がそのこ
とを端的に示している。

*

著者は、そうならないためには発
想の転換が必要であるという。なぜ
なら人間はただ**「主観」**の内側、
だから**「正しさ」**の根拠をつかみ

とっているからである。したがっ
て、問題はその原理を**「主観」**の内
側に内在させていることを明らかに
する点にある。一般にわれわれが
「客観」と称しているものの内実は、
これが現実であることは「疑えな
い」と確信をもつことであるからな
のだ。したがって、われわれにとっ
て主題として考えなくてはならない
のは、そのような確信がどのように
生じるのかという**「主観」**の中での
確信の条件を突きつめることだとい
うわけである。

では人間のさまざまな判断が、こ
れは間違いない(不可疑だ)という
確信を伴うことの意味はなにか。
「知覚」だけは、つねに意識の自由
にならないものとして現われる。
「主観」は自分の外側にあるものの
実在の「確実性」を、主客の「一
致」という仕方を得ているのでは全
くない。**「主観」**はそれをただ自分
の内部からのみ、なんらかの対象存
在の「不可疑性」(「妥当」という
仕方だけ得ている。そして**「主
観」**にそういう「不可疑性」を与え
る根本の条件は**「知覚」**という**「主
観」**にとって自由にならないもの

存在にほかならない」(五七頁)と
説く。ここでいう「知覚」は、現象
学では「自分のうちに生じるさまざ
まな意識対象のうち、意識の自由
ならず、その志向力の彼岸になるよ
うなものとして現われ出る意識対
象」(五五頁)と定義され、「疑いえ
ないもの」、「ほんとうのもの」とい
う確信一般を人間に生じさせる「源
泉」であるという。そして、**「知覚」**
は**「知覚」**だけでは成立せず、**「知
覚」**を含んでいる。よって**「知覚」**にお
いては、かならず**「……として知覚
する」**のであって、**「知覚」**だけは、
つねに意識の自由にならないものと
して現われる。それが「意識の志向
性」といわれるものである。

ところが本当にそうであろうか。
発達の観点に立てば、**「知覚」**がどの
段階で生まれるか、厳密には定かだ
はないとはいえず、知覚対象そのもの
がある意味をいまだ明確にはもちえ
ない段階での知覚体験もあるのでは
ないか。それは解者が常々主張して
いる原初的知覚による体験様式であ
る。この知覚体験の特徴は、なんら
かの意味をもつものとして知覚対象
が志向されがたく、情動のありよう

と共時的に作動するような体験様式である。快か不快か、安心か不安か、いずれかによって意味的世界が容易に変貌を遂げるものとして体験される知覚様態である。そう考えた時、著者も、フッサールの現象学に依拠しつつも、「不可疑性」を与えらる根本の条件は、フッサールが取り上げた「知覚」というよりも、「情動」ではないかと自身の見解を述べている（一三七頁）。このことに辟者も深く賛同するのだ。

*

人間科学における臨床実践とその研究は、人と人が関わる中で生まれる事象を対象とする営みである。そこにおいて研究者（あるいは臨床家、実践家）は関与する者として常に深く関わっている。その中で生まれる事象は研究者自身の存在と関与を抜きには考えられない。関わる相手の盲動すべてが研究者自身との函数として捉えなければならぬからである。しかし、質的研究と称して今日汎用されているグランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）にしろ、ナラティブにしろ、そこでは

不思議なことに語る者としての研究

対象の語りは克明に取り上げられているにもかかわらず、その語りが生成する場に深く関与しているもう一方の当事者である研究者がまるで存在しないかのようなのである。質的研究といいつつも「主観／客観」図式への囚われからくる「主観的なもの」を排除しなければならないとの思いが潜んでいるからではないか。たとえば、ナラティブにおいて新たな物象が生成するとするならば、そこに必ず関与者同士の間で関係の変容が生まれたからに違いない。そうでなければ新しい物象が人生という大きな物語の中でさほどの重要な意味をもつはずはないのだ。単にもうひとつのお話ではない。生きることにとつての新たな意味の発見とその契機となつたものは何か。それを突き詰めていくことこそ、これまで自然科学によつてもたらされた自然的世界観に對峙するかたちで、生活世界に基づく世界観の構築を目指す質的研究の核心ではないか。このことを考えていくと、本書の主題である「主観／客観」図式に孕まれた近代哲学の根本問題の解明は、革新的な意味

をもつと思う。

*

われわれ自身の「主観」の内側に確信を与えるものは何か。研究者自身がそのことを確実に掴み、自己開示し、他者も同様の「主観」による内省作業を行う。そのことによつて相互間で「もはやこれ以上疑うことのできない」ものとしての確信が生まれてくる。共通認識を目指すこのような共同作業の過程こそ、これまでわれわれに「客観的だ」と思わせてくれていた内実なのだ。このことは、人間科学領域における対人援助全般に通底する意味（関係が変わり、相手のところに何らかの変化が起こること）を考えていく上で、われわれに大きな力を与えてくれるのではないか。それは何かと言えば、研究者自身の「主観」に徹底的に向き合い、その中で確かなものとして掴むものが、自己理解、他者理解、関係理解において根本的に重要なものだということである。

手元にある本書は二〇〇二年十二月発行のもので、当時すでに三三刷を記録し、その後の一〇年間でさら

に増刷を重ねながら、今なお多くの読者を得ている。この学問領域では信じがたいほどの離れたベストセラ―であるが、本書を手に入れば、その理由もすぐに頷けるはずである。

小林隆児

（こはやし・りゅうじ／西南学院大学人間科学部社会福祉学科）